

## 当院における母児同室・異室制に関する実態調査

平元 奈々子, 星 順子, 荻山 優子  
千葉 裕子

### はじめに

近年、母と子の絆の形成や母乳育児推進の観点から、母児同室がより望ましいことが広く認識されてきた。しかし、時代の移り変わりと共に産婦のニーズも多様化してきており、母児異室を希望する産婦が存在することも事実である。そのため母乳育児の確立の援助を行うと共に入院中の母親と児の過ごし方について、個々のニーズにあった形で検討する必要があると考えられる。当科ではここ数年、母児同室・異室の選択を産婦自身にまかせている。今回、母児同室者と母児異室者との間で、選択の理由・実施後の感想をアンケート調査し、同時に母乳栄養の確立や育児に対する不安等について両者間で比較検討したので報告する。

### 調査の対象と方法

平成8年3月から8月までの期間に当院にて経膈分娩した産婦で、母児同室者60名(A群)、母児異室者100名(B群)を調査対象とした。両群間に人数差があるのは、当院で全異室制を長く取ってきたため、異室希望者が多く集まってきているためである。両群共分娩後2時間以内に直接母乳を吸綴させ、24時間後より授乳室での授乳を開始している。A・B群間の差は以下の通りである。

A群(母児同室者)：初産婦は分娩後3日目、経産婦は分娩後2日目より24時間母児同室制を開始している。自律授乳を行い、分娩後5日目のみ毎回直接母乳哺乳量を測定した。

B群(母児異室者)：分娩後24時間後より授乳室にて3時間ごとに規則的授乳を行う。毎回直接

母乳哺乳量を測定し、不足分を5%ブドウ糖又はミルクを追加した。

研究方法はカルテ調査とアンケート調査とした。アンケートは分娩後5日目と1ヶ月検診時に施行した。なお異常分娩例(帝王切開、早産など)は除外した。

### 結果

#### (1) 初産・経産の割合(図1)

A群では初産婦が66.1%と経産婦の約2倍を示したのに対し、B群では経産婦が56.0%と初産婦に比して母児異室を多く希望する傾向がみられた。

#### (2) 母児同室選択理由(図2)

「育児に慣れるため」という回答が多く、育児に対する意識が強く感じられた。また「家族と児との面会時間が長い」や「児といつも一緒にいられる」という児とのふれあいを求めている回答が半数近くを占めていた。母乳育児のために同室を選択したのは11.8%であった。

#### (3) 母児異室選択理由(図3)

休息や疲労の回復を強く求めている回答が多く

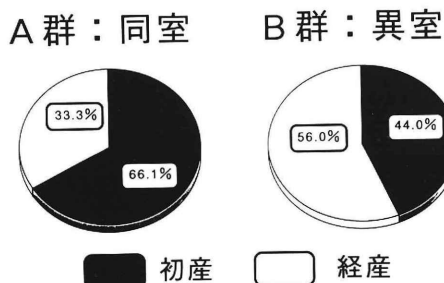


図1. 初産・経産の割合

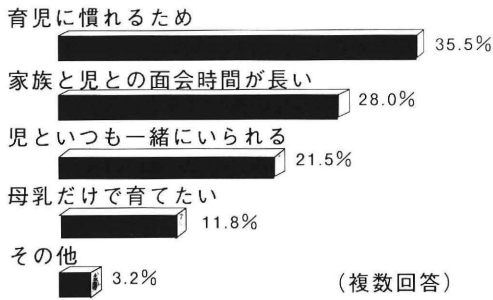


図2. 母児同室選択理由

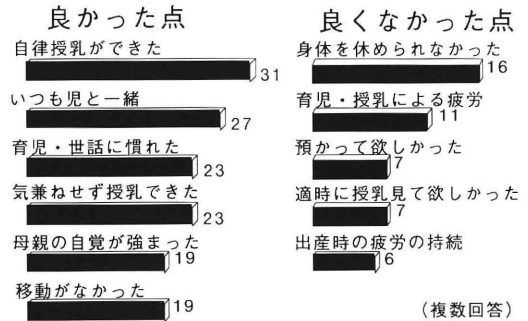


図5. 母児同室の感想

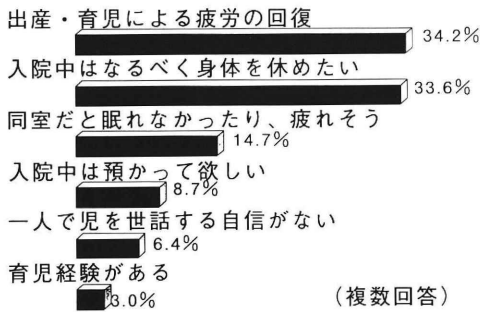


図3. 母児異室選択理由

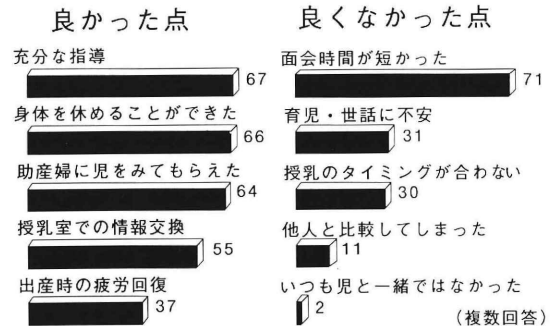


図6. 母児異室の感想

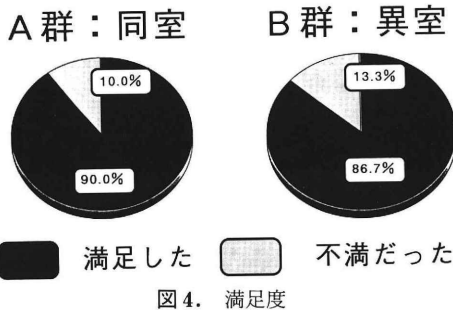


図4. 満足度

みられた。ただ、「入院中は預かって欲しい」とか「一人で世話をする自信がない」など、これからの育児生活に消極的な選択理由を掲げる回答が若干認められた。

(4) 満足度 (図4)

分娩後5日目で、自分の選択に対する満足度を調査すると、両群とも9割が満足したと回答している。

(5) 母児同室の感想 (図5)

「母児同室の良かった点,良くなかった点はどこ

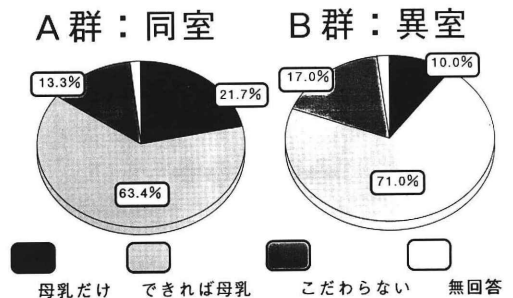


図7. 母乳意識

ですか?」との質問に対し、良かった点では「児のリズムで授乳ができ、母乳育児のために良かった」「いつも児と一緒に安心だった」など同室を選択した理由が良く反映されている。良くなかった点としては疲労を理由とした回答が多くみられた。

(6) 母児異室の感想 (図6)

母児異室の良かった点としては「母乳育児や乳

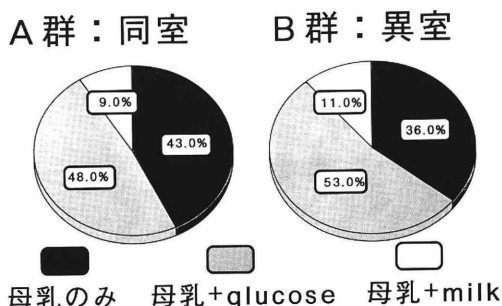


図8. 生後5日目母乳率

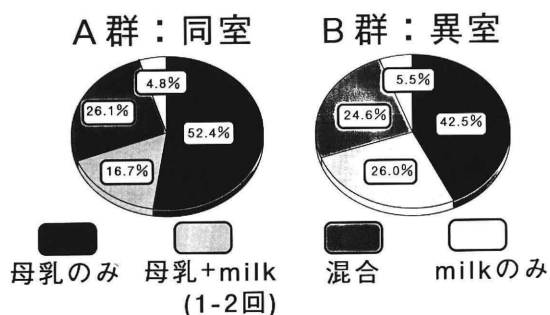


図9. 1カ月健診時母乳率

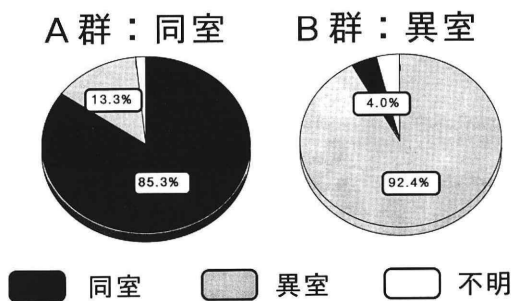


図10. 次回選択

房の手当について充分指導してもらえた」が一番多く、休養・疲労回復をあげている回答が多かった。また良くなかった点としては「家族と児との面会時間が短かった」ことが半数以上を占めていた。

#### (7) 母乳意識 (図7)

同室・異室の両群で母乳に関する意識を調査したところ、「絶対母乳だけで育てたい」とする積極派はA群がB群の2倍を占めた。しかし、「できれば母乳で育てたい」との回答を合わせると、両

群共8割が母乳育児を望んでいた。

#### (8) 生後5日目母乳率 (図8)

生後5日目の完全母乳率はA群43.0% B群36.0%とA群がB群を7%上回ったが、ミルク併用率は共に10%と差を認めなかった。

#### (9) 1ヶ月検診時母乳率 (図9)

1ヶ月検診時にも調査してみると、母乳のみで頑張っているのはA群で52.4%を示したのに対し、B群では42.5%と低かった。ただ1日1~2回程度ミルクを加えている群を含めると、両群共7割が母乳主体で育てているという結果を得た。

#### (10) 次回選択 (図10)

「次回分娩するとしたら、どちらを選択しますか?」という質問に対し、両群共80%以上が今回と同じ入院形態を望んでいた。

## 考 察

家庭分娩が主流であった1950年代の日本では、分娩直後から母児が一緒に過ごすことが普通であった。しかし徐々に家庭分娩は減少し、1965年には施設内分娩が80%以上を占めることになり、同時に母児異室制が一般化された。その理由として、施設分娩ではアメリカの医療制度をモデルとした新生児の感染予防を目的としていたことがあげられる。その後、1980年代に入って母乳育児確立に母児同室制が効果的であり、母子相互作用促進の面からも重要であると考えられるようになってきた。またWHOおよびユニセフは1989年に「母乳育児成功のための10カ条」を提言し、同室制の実施を呼びかけている。

このように、母児同室・異室の選択は時代と共に変遷してきているが、妊婦のおかれている立場・考え方によっても違いがある。今回の調査では、同室希望者に理想的な児とのふれあいを求める初産婦が多く、異室希望者には前回の経験をふまえて、まず入院中は疲労の回復を望む経産婦が多いのが目についた。さらに、それぞれの希望にあった形で対応すれば満足度も良好な結果であり、次

回の選択も今回と同じ形態を望む回答が多かった。確かに、母乳育児確立の点からみれば、同室の方が良好な結果を得たがその差は大きくなく、母児同室・母乳育児確立の徹底化が産婦のストレスとなるケースも認められた。このことより、産婦の希望が多様化してきている現在、個々の妊産婦のおかれた立場・ニーズにそって画一的でないきめこまやかな育児指導を行っていくことが重要であると考えられた。

本研究にあたり、御指導、御協力いただいた産婦人科東岩井先生、齋藤先生、ならびに病棟、外来スタッフの皆様に深謝いたします。また、調査に回答下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

〔本論文の要旨は第37回日本母性衛生学会（1996.10.4. 仙台）において発表した。〕

## 文 献

- 1) 福地彰子：母児同室を文献から考察する，助産婦雑誌 **47(12)**，23-28，1993.
- 2) 福田雅文：完全母子同室の理論的根拠，助産婦雑誌 **47(12)**，9-16，1993.
- 3) 工藤祝子：大学病院における半同母同室制，ペリネイタルケア **14(4)**，21-26，1995.
- 4) 福永寿則：完全母児同室制および母乳哺育への移行，ペリネイタルケア **26(5)**，732-736，1996.
- 5) 伊藤博乃：妊婦・育児期のこころのケア メディカ出版，1994.